ネギの兄貴は吸血鬼？

ossann

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギの兄貴は吸血鬼？

【Ｎコード】
Ｎ８９５０Ｍ

【作者名】
ｏｓｓａｎｎ

【あらすじ】
まさかの転生、しかも転生先はネギま！とな。
これは面白くなってきたーーーーー、と言ったものの何をしよう？
この作品は、ネギの兄に転生したオリ主が自分のしたいことをする、
まあ、作者の自己満足作品です。しかし書くからにはやりますよー。
ちなみにこれが連載初投稿なので感想、アドバイスお持ちしてます。

一時更新停止しますが、感想、意見は随時募集中です、
よろしくお願いします。

設定（この小説で一番初めに読んでほしい）（前書き）

指摘されましたので、後ずけですが、
Ｄｉｅｓ ファンとしては、どうかな？
と思ってます

設定（この小説で一番初めに読んでほしい）

聖遺物について

この小説における聖遺物の定義なのですが、
ぶっちゃけて言えば、どんな感情でもいいので
かなりの「思い入れ」がある道具です。
崇められて聖遺物化、恨まれて聖遺物化など
「思い入れ」と言っても、人の感情ならなんでもござれ。

シュライバーさんの、バイクがいい例です。

んで副首領の術式の代わりに、
聖遺物に認められるか、どうかという設定。

別に聖遺物に意思があるわけではない、
聖遺物と相性がいいかどうかである。

相性が悪いと聖遺物に即、喰われます。

つまり
副首領がいないための、後付け処置です。

設定（この小説で一番初めに読んでほしい）（後書き）

ピン！！！！！！！！！！

ときたら、随時追加。

プロローグ1（前書き）

はじめまして、こんにちは。
初投稿ですが温かい目みてください。

プロローグ1

世の中なにが起こるか分からないものだと思う。

二次小説をいろいろと読み、俺も転生したいなー、なんて
考えながら家へ帰って行く途中、
公園で遊んでいる男の子達を発見。

「ＳＳではこういうシチュエーションで……！！！」

予想通り、サッカーをしていた少年たちの一人が
道路のほうへ転がって行ったボールを
取りに行こうとしている場所にトラックが近づいてきている。

さすがに間に合わないだろう距離なら茫然とするしかないだろう、
だがしかし、
少年との距離は、走りこめば間に合う距離。とっさに体が反応して
た。

少年を突き飛ばすことに成功、しかし俺はトラックと正面衝突。
ははは、テンプレ乙……とか関係ね～～～！！！！

痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイ・・・・

目が覚めるとあたり一面真っ暗だった。
「ははは、テンプレ乙　」
まさかの展開に感動を覚えてしまった。
「あー、感動しているところを悪いんだがのう」
「ッーーーー！！」

うお！いきなり話しかけられて、ビックリした！！
自分の声にならない声にもビックリしてしまった。
「おっと、すまんの、驚かせるつもりはなかったのじゃが　」
声をしたほうを向くと、よくある長い髭を蓄えた賢者の格好をしたおっさんがいた。
「まったくもってひねりがない、こういう時は、土下座で現れるか、変な格好をしたおっさんが出てくるのが普通だろう」
「いや、その辺の二次小説を参考にしてもらってもの～　」
まあ、神？の言う通りである、ひとまず話を聞くことにしましょう。

やっぱり、マジで神様だったが、話をまとめるとこうだ。
あの時の、少年が取りに行ったボールは俺の顔面に向かってくる予定だったらしい。

しかし、このおっさんが、かわいそうだと思いその予定を消したらしい。

んで、適当な場所にボールが転がるように設定したら、そこにトラックが来る予定と
かっぶってしまった。

んで、俺どーーーん。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

なぜだろう怒るに怒れない。神様のいたずらーとか、きまぐれーとか、
そういうのだったらまだましだ、いや良いわけではないただ……、
がああああ、怒りの矛先をどこに向ければぁぁぁぁぁ。

はあ、まあそのお礼に転生させてくれるようだからまあいいだろう。

「んーー、こういう時ってどこの世界に転生できるとか、チート能力を
決めたりできる場面だと思うけど、できるんですか？」
「残念だが、わしは低級神でのう力が弱いのじゃ、能力ならなんとかなるが、
世界に関してはどうのもならん 」
むぅ、飛ぶ世界が分からないと能力決めずらいな。
「どこに飛ばすかはもう決まってあるぞ、たしか、今回はネギまの世界だったはずじゃが」
地の文読まれたようだが、まあツッコマないようにしよう、神様だ

しね。
さてさて、しかし「ネギま」ね〜〜、ふむ。

「あの、能力はいくつも付けていいんですか？」
「先も言った通りわしは力が弱い、魔力はネギまでいうと近衛木乃香より
少し多いぐらい、気の量はジャック・ラカンより少し多いぐらいが限界じゃのう、
あとこれに能力を一つ付け足す程度じゃ、ほんとにすまないのう」

いやいやいや、バグキャラ並の魔力と気があるって十分チートっすよ！！
しかしあと一つ何にしよう？うむむむむmmmm。

プロローグ１（後書き）

能力はＤｉｅｓ　ｉｒａｅの〇番さんのを使おうと思っているのですが、
何か意見があればどんどん感想に書き込んでください。

予定ですが、ヒロインは少なめでこちらにアーティファクトとはべつに
聖遺物を持たせるつもりです。一応誰に何を持たせるか構想はありますが
皆さんの意見も参考にしたいのでＰｌｅａｓｅ感想

プロローグ2（前書き）

続きです。

プロローグ2

「して、決まったかの？」
ふむ、神様を待たせるのも悪いし、ぽっと浮かんだのでいってみよう。
「あの、Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅ　の聖遺物って大丈夫でしょうか？」
「ふむ、以外じゃの、今までここに来た人間は、投影だの宝物庫だの魔眼だの
　〇月作品を良く頼むのじゃが…、まあそんなことは関係ないかの、して、聖遺物
　ということはあれかの、？？番の『罪姫（マルグリット・ボワ・ジュスティス）・正義の柱』
　かの？」

おっと神様がすごいところをチョイスしてきたな、まあ時間を止められるのは
面白そうだけど、あれ流出まで行くからネギまの世界じゃね、勝てる奴なんて
いないだろうからな～～～、ここは、やっぱあの人かね？
「いえいえ、欲しいのはギロチンじゃなくて、？番さんの『闇の賜（クリフォト・バチカル）物』
　ですね」
「お主、変な奴よの、まあ、その辺は深くつっこまんわい、じゃあ、能力はそれで
　いいのかの？　」
「はい、かまいません、けど、どうやって聖遺物を手に入れるんですか？いきなり体に
　入れて異世界に飛ばすんですか？」

よくあるパターンだが正直、このパターンは余り好きではない、戸籍やら
住む所やら、無いものが多すぎる。

「いや、それはない、お主には、赤ん坊から人生をやり直してもらう、
まあ記憶は引き継げるがの」

おおそれはラッキー、衣食住は確保と。しかし赤ん坊から人生やり直すとは、
うむむ、名もなきオリキャラかな?それだと、原作介入するのは面倒くさい
ような気がするのだが。

「その辺の心配はいらんぞ、おぬしには、ネギの兄に転生することになっておる、
というよりも、ここに来た連中は原作キャラの身内にしかなれないみたいでの、
いやはや、わしの力不足じゃの、おっと先に言っておくがおぬし以外の転生者
はその世界にはいないからの、その辺は安心してくれ」

うむ、ネギの兄貴か、悪くない……、むしろいい!来たんじゃねこれ!
ぬはははは、俺もあんな人外バトルしてみたかったんだよね、こりゃ役得
役得、……ちょおとまて、大事なことを忘れているぞ、聖遺物はどうするんだ?
生まれた時から持っているなんてあり得ん、つまり生きていく途中で手に入るってことだから、

まさか・・・

「神様さん、聞きたいんだど、聖遺物どうするの？だいたい想像はつくけどさ」

「うむ、おぬしの考えている通りじゃ、村が悪魔に襲われた時に
お主は拉致られて、聖遺物を体に入れられることになっている、これが
投影とかだったら最初から使えたのにの」

「能力変更は・・・」

「もう登録してしまった、変更は不可能じゃ」

ですよね～、ｏｒｚ

仕方ない多少痛い思いもしなけりゃ人生はつまらない、そう思っておこう。

・・・けど、怖エーーーー、こりゃマッドに体いじくられるの確定だよ、おおう、

いきなり挫けそう。けど負けない、男の子だもん（キラッ）

「きもい」

ヒドイ！！

「まあ、こんなもんかの、それではお主をネギまの世界に送る、だがそこは
お主というイレギュラーが混じった漫画とは別の世界、原作通りに進めるもよし
暴れまくって原作崩壊させてもよし、好きにせい、では達者での」
「ありがとうございます、では行ってきます」
「うむ、行ってくるがいい」

神様がどこから取り出したかわからないが、杖をふるうと俺の体が光に包まれ、
俺は意識を失った。

ふむ、穴に落ちないパターンか、みょーに優しいあの神様らしいな。

プロローグ２（後書き）

次から本編です次は日常編を書くのでまだ聖遺物は出てきませんすみませんがもう少し時間をください。
あと更新は正直不定期です、理由は察してください。

あと、前回のアンケート？らしき作者からのお願いはまだまだ続いてます感想Ｐｌｅａｓｅ

設定（主人公）（改）（前書き）

めっさ後付けしました。

設定（主人公）　（改）

名前：レオン・スプリングフィールド

年齢：（原作開始時）１２歳

身長：（原作開始時）１６３ｃｍ

得意属性：闇・影・土
　治癒魔法も得意

外見：金髪、髪質もアリカ姫譲り。
　眼の色もアリカ姫譲りのオッドアイ
　長さは、肩甲骨ぐらい、ネギより少し長い。

始動キー：「Ｒｏｓｅ　ａｄｅｌｔ　Ｂｌｕｔｎａｃｈｔ」（ローゼン・アデルト・ブルートゥナクト）

聖遺物：『闇の賜物（クリフォト・バチカル）』

聖遺物に関してですが、形成まではサクサク進みますが、創造はそう簡単には出しません。

設定（主人公）　（改）（後書き）

始動キーに関しては、耳コピなのでみのがしてください。
話が進むにつれて増やす予定ですが、なにか意見などありましたら
どうぞ言ってください。

一話（前書き）

やっとこさ本編です
軽く日常編を挟んで悪魔襲撃
に編に行きたいと思います。

一話

どうも、転生者、レオン・スプリングフィールドです。
へ？前世の名前はどうしたかって？俺も良く
わからないのですが、結論から言うと思い出せません。
なんか、そういうものを持っていたけど、どんな感じだっけ？
といった感覚にとらわれてしまうのです。
まあ、ほかの知識は健在だから何とかなるでしょう。

では現状報告、俺2歳、ネギ生後半年と言ったところですか、
2歳の誕生日ごろから、だんだんと自分の意識が
保てるようになってきました。うむ、赤ちゃんプレイは
回避できたかもと思っていました。

ところがギッチョン、そうはいかないようです、
自分の意識が保てるようになったからと言って、
この身は2歳、言葉は全く喋れず、やっとこさ
歩けるようになった未熟な体、それに加え
目の前にいるこのアツアツカップル
見てるこっちが恥ずかしいほどだ。

サウザンド・マスターと呼ばれた無敵の魔法使い
ナギ・スプリングフィールド

災厄の魔女と呼ばれ無理やり罪をかぶせられた
アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

かぁぁぁぁぁ、初めてこの二人を見たときは
感動のあまり泣き出ちまったものさ、だけど

この二人かなりの親バカだった、俺が歩く練習
をしていて、こけるとすぐに飛んでくるし、
二人のことを、パパ、ママと呼んだ時なんて、
俺のこと抱えて、小一時間以上二人してはしゃいで
いたぐらいだ。
おかげで乳離れしたくても全くできませんでしたよ。
まあ、体ガキだったかし、それほど反応しませんでしたがね。
けど、アリカお母さん、なんだか、子供っぽかったです。

んで、今日から俺とネギは悪魔に襲撃されてしまうあの
村に預けられるわけです。
なにも知らなっかった頃は育児放棄したあほ両親
と、思っていました、けど現実はちゃいました。

実は、この村に俺たちが預けられることになるまでに、
月に必ず１０回以上は襲撃されました。
預けられる理由なんて、俺が襲撃された時けがを
したからなんだぜ。

その時の状況何だが、こうだ。

襲撃犯はほとんどナギに秒殺されたのだが、ナギも
俺たちが無事で油断していたんだろう、敵の一人が
最後の力を振り絞って放った「魔法の射手」に対して
反応できなかったのだ、「光の一矢」が何とアリカ母さん
の方に向かってくるじゃないか、とっさに盾になって
いましたよ。

へ？さすがに子供の体じゃやばいと？

いえいえ、こんなこともあろうかと、というスタンス
で、自分の意識が保てるようになってから気を練る練習
をしてたんですよ。
へ？魔力の方はどうしたと？
なぜかこっちは一般人程度しかなかったんですよね、
これが、かなりショックです。神様の嘘吐き。

まあそれは置いといて、案の定、二人に見つかりましたがね、

「さすが俺の息子、天才だぜ！！」
とナギお父さん

「そうか、レオンの頭の中身は父親似なのか、残念じゃ、

しかし、さすがわが息子、天才じゃ」
とアリカお母さん

逆に応援されちゃいましたよ。ははは。
アリカお母さんが、昔はお姫様だったって普通に
忘れてました。

さて、回想の続きだけど、
「光の一矢」が俺に命中、気で気合い防御かましたら、
あたった場所から軽く血が出ただけすみました、
うむ、まだまだ修行が足りないな。
けどあたった場所が頭だったのがいけないのか両親ともに
マジギレ、あたり一面焦土と化しました、怖ェェェェェェェェ。

はい、回想終わり、んで今ナギお父さんとスタンおじいちゃんが
話しているところさ。

「本当にいいんじゃな？　ナギ」
「ああ、頼むじいさん、こいつらは俺達と一緒にいる方が
危険だからな、それにあんな思いはもうしたくねえ」

ナギお父さん・・、それは逃げだよ、なんて言えない、
俺がけがをした時のお父さんの顔は正直一生忘れられない
ぐらい悲痛に満ちていた。

「スタンさん、息子達のことをよろしくおねがいします」
「わかった、アリカ殿、息子たちはわしらがちゃんと、
面倒をみる」

アリカお母さん、昨日はずっと泣いてたよな。
俺もつられて泣いちまったよ。

「じゃあな、じいさん・・・レオン、ネギを頼む
勝手な願いだけど、おまえはなんだか普通とは
違う気がするんだ、だから頼む」

普通じゃないって、あんたにだけは言われたくないよ、
なんて強がっているが正直限界だ、涙腺が・・・

「・・グズッ、わがった、ネギは俺が守るよ、だから
お父さんも、お母さんもちゃんと、帰って、きてね」

両親に心配かけない一心で涙をこらえた。

「ああ、この俺様、ナギ・スプリングフィールドが
悪党どもを速効ぶっ潰してお前たちのもとに、すぐに
帰ってくる、約束だ」
「うむ、それまでいい子にしているのだぞ？　レオン」

そう言って二人は、行ってしまった。

「バカ者どもめ、子供になんて無理難題をおしつけているのじゃ」

そう呟いたスタンおじいちゃんの顔は、いろんな感情が渦巻いている
とてもつらそうな顔だった。

さてさて悪魔襲撃はネギが3歳のころのはず、それまでにやれることは、やってやりますかね。

ネギのために。

一話（後書き）

なんか、gdgdしてしまいました、
ご意見など、どんどんください。
あと、誤字訂正も受け付けます。

二話　現状報告　（改）（前書き）

今回は会話文がないです、すみません。
ですが、次回から悪魔襲撃編に入りたいと思います。

二話　現状報告　（改）

おッす、レオンです、只今俺3歳、ネギ1歳です。
ここまで普通にネギと二人暮らしをしてきたの
ですが、問題が発生しました、それは・・・・

そう、学校です。
原作には詳しく書いていなかったが、逆算するとあの魔法学校、
3歳から入学できるらしい。
当然俺も入学せんと周りに申し訳が立たんと思っていたが
ちょい待てと、まだ1歳のネギを一人にできるかヴォケ、
ということで、村の人や魔法学校の校長に地面に頭を
こすりつけながら、事情説明。

ピロリロリーン

レオンは説得に成功した。

説得力が１０上がった

プライドが３０下がった

まあ、そんなこんなでネギと同じ時期に入学することにした、
さてさて、では悪魔襲撃に備えて訓練しますかねー。

んで只今訓練中～っと、ん？ネギはどうしたのかって？
ちょっと前に仲良くなったアーニャの家に遊びに行っていますよ。
原作同様、面白いぐらいツンデレッ娘である。

さて、脱線したが、主な修行は魔法より気の扱い方を独学で研究中である。日課になっているのは瞬動術、しかも森の中でだ。
ご察しの通り最初は木にぶつかりまくってました、気をまとってなかったら全身骨折レベルの怪我をすることでした。
まあ、おかげで瞬動術は完璧、虚空瞬動もギリギリ及第点
といった出来である。さらに副次的に気をまとうのもうまくなりました、右ストレートで木を折ることに成功する出来栄え。
まあ、４歳でここまでできるようになったのだから十分チートである、
瞬動術だけは、ナギお父さんを抜いた気がします。

ちなみに、魔法に関してはナギお父さんから魔導書をいただきました。初心者用の杖もその時一緒にもらったので
バッチリ、しかし基本魔法の「火よ灯れ」は何回やっても出なかったのに
ほかの「風よ」やら調子に乗って打った火以外の「魔法の射手」は普通にでた
どうやら俺はとことん、火の精霊に嫌われているようだ。
では、火の精霊に嫌われているのなら、ほかの精霊は？と思い、いきなり
順番にそれぞれの属性の中級魔法を打ってみた、その結果・・・・・
闇＝地＞＞＞風＝雷＞＞＞光＞（越えられない壁）＞火
となった、風と雷に関しては中級魔法は威力は下がるが一応
つかえた。光に関してはもう「魔法の射手」を２０本程度出せればよい方だった。
闇に関しては言うことなし、精霊さんがかなり力を貸してくれる、
「断罪の剣」も小太刀程度の長さならなんとか出せるようになった。
地に関してもあまり言うことなし、「石の槍」は普通に、「冥府の

石柱」
は一本だけ出せた、フェイトに比べればめっさ小さいですが。

ふむ、転生者特典なのか十分チートだ、まあ、魔力はやっと一般人より
結構多いぜ！！程度なのであまりつかえないが。
てか、ネギと比べたんだが、あいつまだ魔法の魔の字も使ってないがおれの十倍は魔力を内包してやがった、嫉妬を通り越してあきれたね。

それから一年がたち、影魔法の応用で疑似的な『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』や簡単な治癒魔法も覚えたついでに「始動キー」も作ってみた。
これなら悪魔襲撃のときも大丈夫かな、と慢心したのがいけなかったのだろう。ネギを守ってやるなんて言った自分が恥ずかしかった、そんな自分に、殺意さえ湧いた。

二話　現状報告　（改）（後書き）

さらにgdgdしてしまいました、すみません。
次回は結構会話も戦闘もありますので、
そこで挽回したいと思います。

改定、レオンとネギの年齢を訂正しました

変な矛盾点などありましたらどうぞ指摘してください。

三話（前書き）

少し長めの話になりましたが、
本当に長い人には足元にも及ばない、残念。

ネギ０歳～３歳までの話はいつか番外でしょうと思ってます、
文字稼ぎじゃありませんよ、ほんとですよ？

三話

「ついにネギが3歳になった。子供の成長は早いものです」

「兄さん？誰に話しかけているの」

「気にするな、現状報告みたいなものさ」

「？？？」

ははは、かわいいな～、わが弟よ。

ゲフン、ゲフン、

さて、冒頭でも言ったがネギは3歳、俺5歳、前世の記憶が正しければ、

今年の冬あたりには悪魔襲撃事件が起こるのだろう。

いつ来るかわからない敵を警戒するのはかなりストレスがたまる、ネギがいなけりゃ山一つはふっ飛ばしてましたよ。

よし、使える手札の確認でもしますかね。

その日は久しぶりに雪が降った、春が近いのに不思議なものだ。

「兄さん、今日は何して遊ぶ？」

「ん？そうだな・・、ネギは何かしたいことがあるのか？」

「あっ、今回は僕が決める番か、ならいつもの湖で兄さんの魔法が見たい」

「そうか、よしじゃあ出発だ」

「うん」

そして、二人で手をつないで出発と、しかし、ネギの成長速度は目を見張るものである。
ひとまず、自分の考えを持とう、ということで、俺達二人は遊ぶ時はお互いの意見を聞いて何をするか決めることにしている。
まあ、理由はお察しの通り、

俺：魔力＝一般ピーポー、（気が使えるのは秘密にしているが）

ネギ；魔力＝マジパネー

てことで俺よりもネギの方が英雄の息子という目で周りから見られているのである。
そのための予防策なのだが・・・
立派に育ってくれて、俺、感度！！！！！
と言ったところである。

ネギと遊ぶこと数時間、すると、
「あ、そういえば今日ネカネお姉ちゃんが帰って
来るんだった、兄さん帰ろう」
「む、そうだったか？よし、なら帰るか」
「うん、じゃあ、家まで競争しよう兄さん」
いきなり走りだしたネギを追いかけるようとするが、
何だろう？既知感らしきものを感じる、なぜだ？
その答えは村に着いた瞬間、一気に氷解した。

村についた俺達二人は茫然としてしまった。
「何これ？」

先に声を発したのはネギだった。
俺もはっと我に返る。

（くそ、どうにもならないとわり切っていたが、こんなもの
見せられたら、さすがに、つらいな）

ひとまず冷静になることが先決だと思い深呼吸・・・
「ネカネお姉ちゃん！！おじさーん！！」

ブフゥ！！！ゲホ、ゴホ
おいおいおいおいおいおい、ネギ君何をしようとしてるんだい？さすがにやばいよね、雰囲気でわかるよね？先に行っちゃまずいことぐらい分かるでしょ君ならさぁ、て、おーーーーーーーい、先に進みすぎよネギ君！！こんなところで走っちゃ危ないよ！！！

って！！！俺は何をしてるんだ！！
あいつを守るのが俺の役目だろうが！！
なにグダグダ考え込んでんだよ、チクショウ！！

「まて！？　ネギー！！」

俺もすぐに走りだした。

ネギＳＩＤＥ

僕は目の前の光景が理解できなかった。村が燃えている、
なぜ？どうして？そんな気持ちで頭がいっぱいだった。
兄さんの顔をのぞいてみると、どこか、悔しそうな顔をしていた。

兄さん？・・・そうだ思い出した、ネカネお姉ちゃんが今日帰って
来るって兄さんと話してじゃないか、村の人たちも心配だ、
そんなことを思った瞬間僕は走り出していた、

どれだけ走っただろう、分からない、怖くてうまく考える事が出来
ない。
そしたら、おじさんを見つけることができた、よかった、と思った
けど
その思いもすぐに消えてしまった。おじさんも含めてみんな石にさ
れていた。

なぜ？どうして？
またそんな気持ちで頭がいっぱいになる、けど、もしかすると
これは全部僕のせいなのではと思ってしまう。

「僕がピンチになったら？って思ったから・・・？
ピンチになったらお父さんが来てくれるって、それで
いっぱい危ないことをして兄さんに迷惑かけたから・・？」

そうだ、僕のせいだ、僕のせいで・・・

「僕があんなこと思ったから・・・！」

ドスン！！

「！！ッ」

大きな音にびっくりしたけど、音のした方を見たらたくさんの
怪物たちがいた、もう何も考えられなかった、怖い。

怖い怖い、コワいよ、助けて、だれか、誰か助けて。

「助けて、お父さん、お父さん」

ドズゥ！！

「！！！」

「ごめんな、ネギ、父さんじゃなくて、けど安心しろネギ
父さんはちゃんと来てくれる、それまで俺が守ってやるから」

目を開くと、そこには「石の槍」で怪物を貫いて、いつもの笑顔を
僕に向けている、兄さんがいた。

ネギ　side　out

レオン　side

間一髪とはこういうことをいうのだろう、なんとかギリギリで
ネギを殴りつぶそうとしている悪魔に「石の槍」をぶつけることが
できた。
しかし、お父さんね・・ちょっと嫉妬しちまうぜ。
まあ、そんなこたぁどうでもいい、今やることは一つ、
ネギを守ること・・・、よし、ひとまず。

「ネギ、じっとしていてくれ」

「へ？兄さん！！」

ネギの周りに「石の槍」を展開、さらにこの時のために覚えた唯一の結界魔法をさらに展開。消音、気配消し、そんなものには魔力を使わず
防御のみに特化した結界魔法破れるもんなら、破ってみろや！！

まあ、おかげで魔力はすっからかんだが、気を体を包むように発動させる。

「覚悟しろや、悪魔ども！！」

そして、瞬動で一気に敵の群れに突っ込む。所詮は体当たり、だが俺の体は
かなり濃密な気で強化されてる、その結果目の前にいた悪魔だけでなく、後ろにいた
悪魔達の体に風穴をあけることに成功、

「まだまだ！！」

連続で瞬動し悪魔たちを殴る、蹴る、と連続ラッシュ。
技術なんてないただの喧嘩殺法、力任せに腕を、足を動かすだけ。
それでも、なんとかなるもんだ。
かなりの数の悪魔を魔界送りにすると、全員がネギではなく俺を見ていた
（よし、作戦成功！）

「こっちだ悪魔ども、悔しかったら捕まえてみろや」

そのまま俺はネギから悪魔どもを引き離すため、走り出した。

目に付いた悪魔をつぶしながら村の中を走り回り、今は、村はずれの小さな山の頂にいる。

「ゼェー、ゼェー・・ゲホッゲホッ、はあ、あらかたつぶせたか？
くそ、どこかに術者がいるはずなのにくそう」

けど、今のおれ体はところどころから血が流れ、ふらふらな状態。
返り討ちにあうのが目に見えてる。

「っち、出血は大したことはないが、気の使いいすぎか？
目は霞んできてるし、まともに戦える状態じゃねえなこりゃ」

「それは、好都合。私もなかなか、運がいいですねー」

「！！ッ、誰だ！！」

最悪だこんな時に敵か、相手はどうやら格好からして魔法使いのようだが。

「くッ、てめえがこの悪魔たちを召喚したのか？　」

ひとまず、時間稼ぎだ。

「いえ、違いますよ、私はしがないコソ泥のようなものです」
「コソ泥？ッハこの混乱に乗じて何か盗もうとでもとでも？なかなかな命知らずだな」
「ほほう、ほめてくれるとは嬉しいですね、サウザンドマスターの息子
レオン・スプリングフィールド君」
！！、俺のことを知っているだと、俺とネギの両親のことはＡ級レベルの
極秘情報じゃないのかよ！？
「おや？かなり驚いてるようですね、どこに聞き耳を立てているか分からない
よくあることですよ、ククク。私の情報網は世界一、とでもいっておきますか」
うわ、洒落にならねぇ、くそこんな悪魔が暴れまわってるような場所で暗躍
しようなんて考えてるんだ、実力はそれなりにあるはず、くそ万事休すか？
「む？・・・おっとこれはすごいサウザンドマスター自らご出陣とは」
ばっと、町の方をみて、視力を気で強化する、するとそこにはネギを守るように
悪魔をふっ飛ばしているお父さんがいた。

まさに台風と言える暴れっぷり、思わず見とれてしまった、
戦闘に関して俺は素人、だからだろうか、敵を前にしてこの愚行。
いきなり、首筋に衝撃俺は意識を手放した。
最後に聞こえた、俺を気絶させたであろう魔法使いの言葉は
やはり、最悪名ものだった。

「これでサウザンドマスターの息子を手に入れることができました
さて、いい実験材料になってくださいね」

・・・・まじかよ。

その後、ナギ・スプリングフィールドの活躍により悪魔はすべて消滅、

生存者
ネギ・スプリングフィールド

重傷者
ネカネ・スプリングフィールド

石化されたもの
多数

死者
多数

行方不明者
レオン・スプリングフィールド

三話（後書き）

悪魔襲撃変、終了。

戦闘シーンすくな！！！！

と思う方多数でしょうがすみません。

今の私のせい一杯なのです

はっと気付いた

正直この小説存続の危機では、ということに気づきました。

ひとまずアンケートっぽく

主人公の創造の詠唱ですが、ゲームみたいにオペラから取るべきか？
オリジナル創造の詠唱は、こっちが勝手に作っていいか？

意外な人が聖遺物もっちゃった！！

オリジナル聖遺物、それによりオリジナル形成、創造はありか？

主人公、流出行っちゃった？

である、やっちゃていいでしょうか？
あまりにもやりすぎてＤｉｅｓファンを怒らすのはいやなんですよね。
私もそうですから、

んで、

全面肯定なら？
＋３－Ａに聖遺物を持たせるならだれにどんな、なんてのも考えが浮かんだら
お願いします、刹那などの、武力をもっている人じゃなくても可。

ちなみに、自分が考えているのは、いままでフツ~ の生活を送ってた人
に聖遺物を持たせる気満々です。

これはいいけど、これはダメ、なら？
あと何がダメかも書いてください。
あと上と同じ。

ありえん、ふざけるな？

３－Ａの下りは無視してもかまいません、参考程度です。
？がみょーに出てきたら最初っからチートモノを作ろうかと思います。

四話（前書き）

聖遺物ＧＥＴだぜ！！

四話

只今絶賛ビックリ中、何にって？いや〜〜〜、自分のおかれてる状況です。

普通実験動物にされるなら、目が覚めたら牢の中で、足に鎖ってパターンが

多い気がするんだけど、改めて言わせてもらう、どうしてこうなった？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

さて現実逃避はやめよう、

説明しますと、ワタクシ、レオン・スプリングフィールドなんだか、大きい手術台の上にいます。

さらに、手、足固定状態。

さらに、さらに、俺、はだか。

そう裸なのです、大事だから2回言いました。

ん？どこが大事かって？いやこの状態なら言いたい台詞があるんですよ。

「やめろーー、やめてくれーー（棒読み）」

「おや？起きてしまったのですか？　」

おっと、俺を気絶させた魔法使いか？

「貴様ー、ショッカーの一員か！？」

「は？ショッカーとはなんですか、どこかの組織ですか？」

む、この世界には仮〇ライダーは放映してないのか、残念。

「うんにゃ、ただのネタさね、そんな組織はありゃしませんよ」

「こんな状態でふざけたこと言えるとは、あなたも十分命知らずですよ」

ふむ、やはり俺を気絶させた魔法使いのようだ、ということは・・

「これから、実験開始ってか？　」

「そうですよ、“これ”を体の中に流し込待させていただきます」

そいつは懐から、赤い液体が入った、小さな瓶を俺に見せてきた。

ん？なんか、某小さい錬金術師の話に出てきた賢者の石みたいだけどなんか、めっちゃ禍々しいオーラ放ってんですけど、スンげー怖い。

「何？それ」

いやな予感ぷんぷんするんだが？

「これはですね、かの有名なヴラド・ツェペシュの血液、その結晶化した粉ですね」

ははははは、って、ええええええ！串刺公ですか！？その血液の粉！！・・・・粉？いや、液体だよねあれ？

「どこが粉だよ、液体じゃねーか！！つか吸血鬼にでもする気ですか、コノヤロー！！」

「おっと失礼説明が足りませんでしたね、正確には粉だったものです。

今まで何回もの実験を繰り返したのですがすべて失敗してまして、実験体を

吸収してしまったのですよ。言ってしまえば、今までの実験体のなれの果て

でしょうか？しかし、吸血鬼の下りですは正解ですね、いったいこの聖遺物

でどんな吸血鬼が生まれるかわくわくしますよ」

聖遺物？何か引っかかるが、正直やばい、危険すぎる、
ぜってーあの中にはブラド・ドラクル公の血液だけじゃない、
今まで犠牲になった人たちの怨念も入ってるにきまってる、
ってこのやろ、にじり寄ってくるな！！なんだその切れ味よさそうなナイフは！！こういう時は
メスじゃないのかよ、って何振りかぶってんだこいつ！！やめろ、ちょ、待て！！

「さて、では実験を開始しようかね、まずはっ！！」

ザクゥ！！

がぁ！！胸が痛い！！いや熱い！！がああああああ！！！！

「この聖遺物はすでに魂の塊とも言える状態だからね、直接、心臓

に埋め込むべき
　だと思うんだよね、さて、埋め込むとしようかね、・・ふん！！」

ゴガア！！傷口に手ツッコム奴がいるか！！ボゲェ！！痛えよ！！チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ、チクショウ・・・！！！！！何だ！！血が全身を犯している！？体が！！俺のものじゃなくなる！？

ガアアアアアあああああああaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

（ふむ、なかなか美しいものを持っているな、これは契約の代価としてもらうぞ少年）

そんな声を最後に聞き、俺の意識は、落ちて行った。

ーー

ｓｉｄｅ　？？？

「おや、拒絶反応が起きない？・・・つまり成功か？・・・はは、やった成功だ、成功したぞ！！
・・・・・・・・・・・ふむ、少し肉体の破損がみられるが、大

丈夫だろう」

くくく、あの英雄の息子が忌み嫌われる吸血鬼か、これは面白くなりそうだ。

side　out

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

side　レオン

ふと、目が覚めるとそこは牢屋、いや檻の中か？律義にベットの上とは。しかし、

ううううう、実験の後遺症が残ってんのか？体中が痛いぜ。

「グゥアズウウウ、痛え、チクショウあの変態絶対ぶっ殺す！！」

近くの壁を叩いた。

ドゴ！！

穴とまではいかないが、壁にクレーターができた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？

あれ？おれ気やら魔力やら使ってないぞ？え？生身でこれ？

・・・マジすっか。

・・・・・・あ、そっか、聖遺物のせいか、てちょっと待て、なんで今聖遺物のことをすべて思い出したんだ？神からもらえなっかったからこっちで手に入れる、って・・・・・、なんか納得、これも転生者特典か？

聖遺物のことは、
手に入れるまで忘却の彼方へってか、いらんわ、そんな特典。

さてはて、これからどうする？ここから逃げるにしてもなーー。
うむむむむ、ほかにも檻はあるみたいだし、ものは試しか？

『おーーーーい、誰かいるか～～～？』

って、あり？とっさに日本語で叫んじゃったよ！？なぜに？

『あ？誰かいるのかよ？』

おっと、ビックリ、いましたよほかの人、割と近くから聞こえてきたってことは隣か？
しかも、日本語だし。

さてはて、どうしようかな？

四話（後書き）

オリキャラなんですが、見た目、性格まんまあの人を使います、名前はかえますけどね。

五話（前書き）

オリキャラ登場！！こいつとの付き合いが一番長くなる予定です。

五話

Ｓｉｄｅ　？？？

ドゴン！！！

「んあ？なんだよ？うるせえな、人の安眠を妨害するとは何様だ？チクショウ」

『おーーーい、誰かいるか～～～？』

『あ？誰かいるのかよ？』

ん？日本語が聞こえたからとっさに日本語で返しちまったが、状況から
察するに、新しい適合者は日本人か？はっ、あの糞マッドも懲りないね～、
まあ、結構前に俺以外、全員聖遺物に喰われたからな、久しぶりの話し相手
が出来たってわけだ。まあ、声の出所から隣か、顔が見れないのは残念だな。

「すみませーん、ちょっといいですかー？　」

は？今度は英語か？しかもかなり流暢だったぞ、おい。
・・・まいいっか、せっかくできた話相手だ暇つぶしぐらいにはなるだろうよ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　レオン

んむ？声がしたのは隣からか？誰かいるのは、こちらとしてはラッキーである。
何としても情報をあつめねば！！

「すみませーん、ちょっといいですかー？　」

ありゃ？今度は無意識に英語で喋っちゃった？
いや、さっきの日本語の方が無意識だったから、こっちが普通でしょう。
てか、俺転生してから純・・・いや、一応イギリス人だからね。

「なんだ？新入り」

おおぅ！あっちも英語に変わった、こっちに合してくれたみたいですね、
感謝です。さて質問タイムです。

「え～と、新入りってことは、あなたも拉致られたクチですか？」

「まあな、人生詰まんねえ～、って思っていろんな事やって、結構いろんなこと

したんだが、それでも詰まんねえ～、そう思ってた矢先いきなりここに拉致られて
改造人間ごっこを体験させられたよ、どこぞのショッカーだよ全く」

あり？ショッカー？

「すみませーん？仮〇ライダー、知ってんですか？」

「まあな、ガキの頃少しだけみてたぜ、敵の改造人間の名前や見た目の
シュールさによく爆笑させられてたよ」

おおう、子供のころ妙に大人びてしまった、可哀そうな人ですね。
おっと、話がそれてしまった。

「あはは、そうですか、では、さっきの話の続きですが、ここにあなた
以外の人はいないのですか？」

「てめえが、話逸らしたんだろうが、たっく、・・んで、その質問なんだが
誰もいないよ、正確には、聖遺物に喰われて全員死んじまったよ、別の牢屋
見てみな、運が良けりゃ、まだ回収されてない聖遺物が拝めるぜ」

・・・ん、向かいにあるのは・・・剣かな？いやはや、なんか霊格高そうなのに、
こんな薄汚いところにあるとは、可哀そうにねぇ。

「ありますよ、なんか変な形の白い剣がみえますね」
「変な形の白い剣？あぁ、あいつか」
「知ってる人ですか？」
「べつに、最近死んじまった奴だから覚えてただけだ、なかなかベッピンさんだったぜ」
「はぁ、そうですが、参考までに、あなたは何の聖遺物を埋め込まれたんですか？」
「埋め込まれる？よくわかんねぇけど、俺はよくわからん日記だったな」
「日記ですか？なんかかわいらしいですね」
「はっ、あれがかわいらしいだ？ないない、イカレタ女のイカレタ拷問教本だぞ、
契約させられて、書いてあること全部一気に頭に流し込まれた時はさすがの俺
でもやばかったわ。
まあ、どうやらこの知識のせいで俺以外の契約者はいきなり発狂して逝っちまった
みたいでな、逝った人間の魂全部吸ったこの日記、俺が契約する時、まわりから
ドス黒いオーラ発しててよ、かなりビビっちまったぜ。」
あー、この人も俺と同じパターンか、可哀そうに。にしても拷問日記ね～～～。

「その日記エリザベート・バートリーが書いたものですか？」
「あぁ？ちょっと待ってろ、今確認する・・・、おおその通りだぜ新入り、
お前物知りだな、じゃあ、お前の聖遺物、なんなのか教えろよ、あの糞
マッドのことだましなものじゃないだろ？」
「『闇の賜物（クリフォト・バチカル）』」
「なんだそりゃ？」
「ヴラド・ツェペシュの血液なんて言いたくないですから、吸血鬼の契り
から自分でそう呼ぼうと思います」
「おー、かっこいいね、俺のにもなんか名前付けてくんない？
拷問日記じゃカッコ悪いでしょ？」
「そのまんま、『血の伯爵夫人（エリザベート・バートリー）』でいいんじゃないんですか？」
「おーかっこいいね、ありがとうよ」
「どういたしまして、・・・あ、大事なこと聞くの忘れてました」
「大事なこと？なんだよ？」
「あなたのお名前なんですか？」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「おっと、いけね長いこと名前を聞かれなかったから、忘れてたわ。
俺の名前は『遊佐　拓真』（ゆさ　たくま）、よろしくな」

「壁越しですが、レオン・スプリングフィールドです」

「お？やっぱ隣にいるのか？あんた？なら今からそっちに行くわ、
・・・一応壁から離れてな」

ん？何をする気だ？・・・まあ、言われた通り離れますかね。

「おらよ！！」

うお！！いきなり壁にひびが！！

「せーーの、・・らぁ！！」

ボゴォ！！

おおう！！！壁が抜けた！！

・・・あーーーー、なるほど、あの棘付き鎖を壁に刺して力任せに
引っ張ったのか。

さすが聖遺物、人体、魔改造されてるよ。

さて、現実逃避はやめにして、・・・・うは！！髪の色以外ほぼＤ
ｉｅｓの司狼かい！！

いや、ここはスルーだ、別に気にすることではないしな。

「なんだよ？黙りこくっちゃって、大丈夫か白すけ？」

「は？白すけ？」

「髪が真っ白だから白すけ、分かりやすいだろ？・・・てかよく見たら、眼真っ赤じゃん。
マジで吸血鬼みたいだな」

え～～～！！髪真っ白！！眼真っ赤！！なぜ？

「その様子だと、もとからアルビノってわけじゃなさそうだな、となりゃあれだ、
聖遺物に持ってかれたなそりゃ」

「契約の対価ってわけですか？なんで色素取られるのかわけわかりませんよ」

「まあ、あれだ、聖遺物の特性が関係してんだろ、俺の場合なんだが
痛覚、味覚、嗅覚を持ってかれた。 拷問には痛覚が必要だから聖遺物が欲した、
だから取られた、俺はそう考えてるね、まあ残りの二つは、対価が足らないから
感覚つながりで持ってかれたんだろ」

なるほど、じゃあ俺はなぜに色素？しかも母親譲りの自慢の髪と眼の色素？
・・・あ～～、吸血鬼は美しい者しかなれなかったはず、だから、お姫様譲りの
髪と眼をを持ってかれたのか。視力まで取られなくてよかった、と思っておこう。

「さて、結構話し込んだし、名前も確認した、ここいらで重要な話があるんだが？」

いきなり唐突ですね。

「なんです？」

「ここから逃げ出さないか？お前と俺で？別にここを制圧でもいいぜ」

「のった」

俺は即答した。

五話（後書き）

後書き　オリキャラ、ありきたりですみません。

さて、聖遺物の特性、契約と対価の巻きでした、
こんな設定ですみません。こうしないと、主人公の白すけ
設定が説明できなかった、のもあります。
温かいめで見守ってください。

あと、はっと気付いた、の回のアンケートは随時
受け付けております、３－Ａの下りも、何か思うことがあったら
感想ください。

六話（前書き）

脱出編です、お楽しみください。

六話

「おい、白すけ、この状況どう思う？」

「聖遺物便りの雑魚だ、問題はない、ただ・・・」

「聖遺物がチートだな、ありゃ」

「ああ、再生能力信じて腕の一本くれてやるしかない」

「同感だ、んであいつを地面に縫い付けて逃げると？」

「ああ、他のやつらはあれだけボコったんだ、すぐには復活できないはず」

「逃げるための足は？」

「サイクロン号をパクってある」

「バイクに名前つけるなよ！てか、だせぇ！」

「てめ～～～、全一号ファンに謝れ！！！！」

「だ～～、うるせえ、敵さんぶっ放す気満々だぞ！！」

「はあ、それじゃ」

「まあ」

「「行きますか！！！！」」

数時間前

「さて、まずは情報を整理するところから始めますか」

「んじゃ、お互い何ができるか確認だな、拓真は鎖以外なんか出せるのか？」

「残念だが、喰った魂の数が少ないせいか、それだけだ」

ふむ、凡庸性が高いから十分だと思うが、俺はどうなんだろう？
ひとまず、血が聖遺物化しているから、？番さんの真似でもしてみますか。
・・・一応成功、手のひらから高さ２０ｃｍ程の長さの、でこぼこな円錐形の
血の結晶が出現、壁に杭打ちアタック（杭付き掌底）したら、壁と手のひら
がくっつきました。あいた穴を観察したところ、壁の中の水分を吸収して砂に
していたようです。砂ワニさんを思い出したのはご愛敬です。

いろいろ試したところ、体からからは２本しか杭は出せず、最大３発までしか
杭を射出出来ない、つまり「発射？１０秒？発射」の発射の部分が３発、・・・ひでえ！！
杭が飛んでいくスピードは銃の球並みに速いが、１０秒って・・・。

「さて、お互いの聖遺物について確認できたが・・・、どう思うよ、白すけ？」

「白すけはやめろ、・・・はぁ、正直微妙、身体能力が跳ね上がっているのが唯一の救いだ」

「同感だな、てか地味！！」

二人してｏｒｚ状態である、魂を喰った量が少ないから仕方ないのだが。

「は～、うだうだ言っててもしかたないですから、別のことを話し合いましょう、
この辺の地理とか、敵のこととか、何か知ってますか？拓真さん」

「・・・・・・」

「なんですか、その、こいつキモっ、って言いたそうな顔は」

「いやお前にさん付けされるのは、はっきり言ってキメェ、呼び捨てでかまわねぇよ、
その代わりに俺はお前のこと白すけって呼ぶから」

「へいへい分かりましたよ、それでいいですよ。じゃあ、話の続き

をお願いします」

「実はなこの研究所、回り砂漠なんだよ」

海じゃないだけまだまし、はい次。

「敵さんについてだが、普通の人間がいっぱい、ド外道魔法使いがわんさか、んで、
俺達と同じ化け物が数名いるらしい」

「その化け物さんの聖遺物および特徴は？」

「まずあの俺達を怪物にしてくれた糞マッド、その護衛が一人、こいつはなんか燃える剣
を持ってたな、それから外に監視兼迎撃役の砲撃ヤロー、これだけだ」

「意外と少ないな？」

「まあ、他のやつらは研究所の外で任務をこなしているらしい、そいつらについての
情報は皆無だ」

「ふ～ん、じゃあ何で拓真はこんなところにいるんだ？」

「俺もお前と同じで拉致られたからな、いきなり拉致られて、改造されて、挙句仕事しろだ？
ハッ、笑わせてくれるね、だれがするかってんだ」

「納得、・・・まあ、全力全壊で暴れればなんとかなる気がする」

「なんだよ？星を軽く壊すビームでも撃つのか？」

「今の俺ならやれなくもない」

「マジで！？」

「冗談です、そんなことより拓真は魔法と気についてどれだけ知ってる？」

「気は使えるから問題なし、魔法は、ここで魔法使いと殺りあったから問題なし」

「聖遺物の実験で、か？」

「そういうこと、さてとそろそろ行きますか」

「ＯＫ」

それじゃあ鉄格子蹴り破って・・・・、

戦争じゃーーーーーーー！！！！！！！！！！！

・・・・・結果

「聖遺物ってチートｏｆチートだな、白すけ」

「魔法使いが普通レベルだったからね、しかしリアル『ふはははは、人がごみのよ一だ』
発言ができるとは夢にも思ってなかったわ」

「敵、あと一人だけだけか」

・・・・え？聖遺物組はどうしたかって？

糞マッド
拓真が鎖８本中７本で敵の攻撃をはじいて残りの１本で腹を串刺し、
んで残りの鎖でめった刺　　し・・・、終了となりました。

護衛
自分を気で強化、見事な太刀筋でしたが「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄・・・」と言いながら、
あいての攻撃を避け続け、振りかぶったところに肩から体当たりする形で瞬動、
インパクトの瞬間肩から杭を生やし串刺し、ひるんだところにアイアンクロー、
さらに、手のひらから、パイルバンカー！！、あとはおいしく吸収させていただきました。

「おい、白すけ、何たそがれてんだよ」

「違いますよ画面の向こうのお友達に説明していたんですよ！！」

「意味わかんねえよ、てかそれメタ発言」

はい、話がそれましたが、研究所ないの敵は全殺ししました、人を殺しても何も
感じないわけではなかったが、気落ちとか全くしませんでした、聖遺物のせいだと思いたいです。
で、今は魔法具などがたくさん保管されてる倉庫にいます、奪えるものは奪う基本ですよ。
ついでに牢屋の中にあった聖遺物も回収済みです。いや～～、影魔法便利です。

ただ、ビックリなのは、Ｄｉｅｓの代名詞ともいえる、ギロチン、破壊の化身となる、ティーガー戦車
が残っていたことにびっくりだが。（もちろん回収済み）
ちなみに余談だが、影魔法の疑似空間がいっぱいになったのか、途中から
聖遺物が影に入らなくなったから、拓真に影魔法の疑似空間を教え残りをそこに突っ込んだ。
聖遺物の持ち主の元ネタのせいか、それとも、影魔法が得意な人の魂を取り込んだのか
分からないが、拓真は異常なまでの影魔法の適性があったことをここに記そうと思う。

「さて、作業もあらかた終わったし、魂喰いまくって聖遺物も強化された」

「お互い、使い勝手のいい武器見つけたし、ＨＰは満タン、バッチこいだ」

「なら、最後の砦」

「つぶしに行きますかね」

「その前に、外に出るなら、直射日光対策を・・・」

「しまらねぇな、おい」

Ｓｉｄｅ　三人称

「久しぶりのシャバだな」

「こっちはそれほど懐かしくはないんだけどね」

二人が軽口をたたき合っていると、前から一人の人影がちかづいてきた。

「あれが、最後の一人か？」

「ああ、そうさ、あれが最後の一人、いうなれば『超弩級・戦艦砲』さ、ちなみにドイツ製」

「おいおい、名前から察するに、それとっくの昔に沈んでいるよな（・・・・・・・）？」

「ああ、だがこの組織昔っからあったみたいでな、こんな時のためにわざわざ、沈んだ
場所に行って、残骸拾って組み立てたらしいぜ？」

「じゃあ、やばくね？」

「ああ、ヤバイ、だが主な任務が監視のせいでそれほど人を殺しているわけでもない」

「付け入る隙は防御だけってか、きついね」

「ごもっとも」

二人が苦笑し合っていると、凛とした女の声が響いた。
「作戦タイムは終了か、貴様ら」
白い軍服を身にまとった、隙のない美女がそこにはいた。
「ああ、終了だ、んで手前ぇを倒して、ゲームセットだ」
拓真がひょうひょうとうけこたえる。
「残念だが、中にいた雑魚と一緒にしてくれるなよ」
「ご忠告ありがとう、だが俺達が勝つんだ、いらない忠告だ」
レオンが軽く挑発する。
「そうか、・・・エレナ・ロイ・ヴォルシュテイン！！　貴様らを塵一つ残さず
吹き飛ばす者だ、貴様らも名乗れ」
「遊佐　拓真、しがない『歩く拷問機器』さ」
「レオン・スプリングフィールド、なりたての『串刺し公』だ！！」
拓真は頂戴したデザートイーグル、レオンは赤い真っ赤な槍をエレナに向けた。
「「おおおおおぉぉぉぉぉぉ！！」」

次の瞬間二人は駈け出したが、

「副砲、放て」

エレナの命令がはせられた瞬間、エレナの周りから8本の砲身が現れ、火を噴いた。

「「ッッ！！」」

二人はとっさに左右に飛び直撃は免れたが、後ろから大爆発が起きた。

「今のを避けるか・・・」

エレナは、感心するように二人を見ていたが、

「おい、白すけ、あいつのことどう思う？」

「強化なしで（・・・・・）避けられるんだ聖遺物便りの雑魚だ、問題はない、ただ・・・」

「聖遺物がチートだな、ありゃ、まだ出てくるぜ」

「ああ、再生能力信じて腕の一本くれてやるしかない」

「同感だ、んであいつを地面に縫い付けて逃げると？」

「ああ、残るはあいつ一人だが殺せるかは自信がない」

「逃げるための足は？」

「サイクロン号をパクってある」

「バイクに名前つけるなよ！てか、だせぇ！」

「てめ～～～、全一号ファンに謝れ！！！！」

「だ～～、うるせえ、敵さんぶっ放す気満々だぞ！！」

「はあ、それじゃ」

「まあ」

「「行きますか！！！！」」

また二人は同時に突っ込む。

「副砲、発射」

また砲身が火を吹くが、二人はそれをたやすくかわす。

「クッ！」

二度も簡単に避けられ、少し苛立ちを見せるエレナ。

「遅い！」

さらに突っ込むレオン。

レオンの槍での付きをなんとかかわすエレナ、そこに拓真がデザートイーグルで

追撃にかかる。
避けることができず目に向かってきた球を腕で受け止めるが、その瞬間、拓真が瞬動で懐にはいる。
そして、聖遺物の特性を込めた弾丸を至近距離ではなつ。

「グゥゥゥゥ！！」

その弾丸には、毒液の特性が込められていたようで、エレナの腹を溶かす。

「なめるな！！」

「やべっ！！」

そうエレナが叫んだ瞬間、すでにエレナのわきの下の空間から砲身が出現して、火を噴いた。

「拓真！！」

爆発で拓真が吹き飛ばされてきた。

「ゴボ、ゲホ、ハァ、ハァ、危なえ、とっさに鎖で壁作らなかったら死んでたな」

拓真の右手を見ると、肘から先が吹っ飛んでいたが、再生を始めている。

「あの女、逃げちまったみたいだな」

「え？」

レオンは拓真のことを気にしすぎてエレナが逃げたのを気付けなかったようだ。

「はは、まあ、問題がかたずいたんだ、さっさと逃げようぜ」

「ああ、だがその前にっと」

レオンは影から起爆装置を取り出しボタンを押すと、基地が火柱を上げた

「おーー、吹き飛んだな！！」

「てか、爆薬まで保管しとくもんかねぇ、普通」

そして、レオンは、影から奪ったバイクを取り出し、拓真が運転、レオンがその後ろに乗った。

「じゃあ、出発だ」

二人はその場を後にした。

Ｓｉｄｅ　エレナ

爆発の煙にまぎれて逃げたエレナ、その顔は歓喜に染まっていた。

「はは、遊佐　拓真か、いい男じゃないか、・・・殺したいぐらい！！」

なんか、いらないフラグがたった拓真だった。

六話（後書き）

主人公より先にフラグを立てる拓真でした。
このまま時間ふっ飛ばして、主人公をイギリスへ帰らせようかとおもいまっす。
この後何が起きたかは番外編にしようかなと思います。

正直ネタが思いつかないだけなんですが。

あと、レオンが槍を使い始めたのは、拓真と相談して、聖遺物を使いすぎて、有名にならないため。
ジャック・ラカンみたく、俺は素手の方が強い、的なのりです。

七話（前書き）

グダグダしてます

すみません。

七話

ウェールズ到着！！長かった旅生活も終わりとなりました、
ひとまず、俺９歳、ネギ７歳です。
つまり、ネギは後１年で魔法学校を卒業してしまうのです。

え？そんなことより、４年間何があったか話せと？
めんどいので、簡略化・・・・。

１年目
研究所が中東にあったので、紛争地域に拓真と二人で殴りこみをしたり、ＮＧＯの手助け、をしたり
してました。ちなみにこの時、俺は幻術で１８歳ぐらいに変装、肌も真っ白にして、年中、
フード付き長袖、長ズボン、そしてサングラス、と日光対策バッチリ装備でした。
ついでに拓真は髪の金髪に毛染めてました。変装の意味がないと言うと、本人いわく、
「これでも、分からない奴は分からない」
らしい、本当だろうか？
ちなみにこの時俺は「ヴィルヘルム・エーレンブルグ」拓真は「藤井　司狼」を名乗っていました。

そして、この時別の聖遺物持ちとバトルしました。
正直速いだけの蚊トンボでした。
人殺しには慣れているけど、殺し合いには慣れてない、
速いといっても、気で脳を活性化させ、動体視力などをあげれば、
簡単に動きをとらえることが
できました。俺がカウンターの要領で杭を腹に打ち込んだら、逃げ

やがりました。

2年目

日本の京都に殴りこみをかけました。

近衛　詠春と会いナギの息子だと公言、幻術を解いて、髪を金髪、目をオッドアイに変更、

これで信用してくれました。

ついでに槍の使い方を教えてもらいました。（これが殴りこみをした理由）

聖遺物のことを詠春と相談もしました、聖遺物持ちとあったら、逃げるように釘を刺しときました。

しかし青山鶴子という女剣士に拓真ともども、ぼこぼこにされたので、

「バグキャラ以外の人、相性が悪い相手と戦う時、は逃げてください」

と、訂正しときました。

腕、普通の刀で切り飛ばされたので、1日ずっと借りた部屋で、拓真と一緒にガタガタ震えてました。

鶴子さんは、人間でありながら、化け物というのが俺と拓真の共通認識となりました。

最後に、詠春の頼みで、桜咲刹那と会うことになった。

白い羽のことだろうと予測はついたので、拓真と二人で説教、と試合をしました。

荒治療だったが、少し効果はあったようで、少しだけまともな顔をになりました。

2年と半年目

詠春のコネで魔法世界へ行きました。
拳闘士大会で暴れまくりました、ついでに俺は「白い悪魔」拓真は
「全身拷問機器」
というみょーな二つ名をゲット。

んで、フェイトにあいました。完全なる世界に入らないかい？と言われたが、
俺は丁重にお断り。拓真は賛同。ちなみに理由は、

「星一つ消すなんて、そうそう体験できるわけねーじゃん？
俺はやったことのない事をやる主義なんでね」

だそうだ、あいつらしいのでそこでお別れすることになった。

んで、修行して地球に返ってきました。

「さて？帰ってきたはいいが、どうしよう？」

たぶんだが、自分は死人扱いされているのは予想できた。
悪魔襲撃で大半の人間が石化され、殺された人間もいる。そんな中で石にもなっていなければ、
死体にもなっていない者は珍しいが、悪魔に喰われたと考えられるはず。

「・・・よし、決めた！！　夜に魔法学校に侵入して爺をビックリさせよう」

ひとまず、生徒さんがほとんど帰った時を見計らって潜入。
グラサンはずして堂々としてたら、意外と奥までこれた。
しかし、途中で魔法先生に見つかり全力ダッシュ！！

そして、やっとこさ爺とご対面。

「それで、お主は何者かの？」

「自分の孫の顔忘れるとはひどいですね？　それとも俺は死んだことにでもなりましたか？」

「！！！！、お主・・・まさか、レオンか？」

「正真正銘、本物レオン・スプリングフィールドですよ」

それからは、てんやわんやだった、爺さん泣いちゃうし、秘書さんビックリしてるし。
まあ、待ちますかね。

ひとまず落ち着いたので、何があったか話す。
聖遺物持ちの相手の対処法の下りは、お父さんクラスなら勝てるそれ以外は逃げろ、
と釘をさしたら、顔を青くして了承してくれた。
一番おもしろかったのは、自分が魔法世界で「白い悪魔」と呼ばれてたことを伝えたら、
爺が椅子から転げ落ちたことだ。

そして、これからのことを、はなすことにした。

「ひとまず自分を、今まで病気で休学していたという扱いでネギと同じ学年にしてください
そして、ネギが卒業する時、一緒に卒業させてください」

「ふむ、それぐらいならかまわないぞ、お主の実力はお墨付きじゃしの」

誰のお墨付きなのだろう？

「あ、それと、自分魔力ほとんど聖遺物に喰われているので、あまり魔力がありませんので
そこんとこ、よろしくお願いします」

「そうか、ほんとは何か隠してるのじゃろうが、成績には最低限の色はつけとくぞ」

「ありがとうございます、ではこれで」

「ネギのところに帰るのか？」

「ええ、大切な家族ですから」

この時、俺はものすごくいい笑顔をしていたと思う。

「すみません、ネギの家の場所教えてください」

「だいなしじゃの」

ここが、ネギの家のようだ、・・・・魔法でカギを開けて〜〜〜、

「ふはははははは！！　私は帰ってきたぞーーー！！」

・・・・・・・・・・・・あり？反応なし？
どうしようか悩んでいると、奥からネギがやってきた、
さらに奥で、危ないとか戻ってこいとか言ってるが無視。
いい笑顔でネギに言ってやった、

「ただいまだ、ネギ」

「兄ざーーーーーーーん！！」

ワーワー、泣きながら飛びついてきやがった。はぁ、かわいいね。
それから、ネカネ姉ちゃんや、アーニャもすごく泣いてました。

それから1年無事俺とネギは学校を卒業、俺は実質1年程度しか学校に通ってないが、
休学者として扱われているので、7年かかって学校を卒業したことになっている。
まあ、座学はまあまあ、実技もまあまあ、と落ちこぼれ生徒を演じてきましたが、
そのせいでかばってくれたネギとアーニャも被害が及んだので、二人には説得、
二人をいじめたやつは、放課後呼び出して、クククククク。

そんなこんなで、卒業式も終わり、ネギと課題が何かなどと、たわいもない話をしております。
お、どうやらネギの課題が何か出てきたみたいです。
文字が自動的に浮かび上がるって便利だよねーー。
しかし、学校の先生か、校長が決めたのだろうか？　んむ、それはないな、きっとＭＭ、のくされ爺どものとこに行くやら、なんやらと言ったネギを政治の道具にしようとする課題とすり替えたんだろうな、だいたい、日本の数ある学校から、爺の友達がいる魔帆良学園に行けなんて都合がよすぎる。

「ねぇ、兄さんの課題は何なの？」

おっと、考え込みすぎたな、しかも自分の課題なんて忘れてたぞ。

「えっと、お！！」

「なになに？」

「ネギとおんなじだ」

「ほんと！　やったー」

一応、甘やかすのはいけないので、軽くチョップを入れておく。

「いて」

「こら、ネギ課題が一緒だから嬉しいのは分かるけど、俺にべった

りはなしだぞ
　長い間一緒に居れなかったのは、悪いと思うが、これは立派な魔法使いになるための
　試験なんだ、相談には乗るが、俺を頼りすぎるなよ」

「う、うん、わかった」

この一年、今までの反動かネギもアーニャも俺にべったりだった、
悪い気はしなかったけど、
甘えすぎはダメだと、説教してしまったこともある。
ネギは、立派に育ってほしいから、さらに、説教じみた会話もいくつかしてしまった。
それでも、俺のことを好きでいてくれるネギに心を痛めました。

「さて、じゃあ、日本に出発するまで、日本語の勉強をしますか」

「うん」

ぐわ～～～～！！　笑顔がまぶしい！！

この後、日本語をネギに教えたら、２か月でマスターしました。
原作より早い！！！

ちなみに、ネギたちには、襲撃事件の後は何をしていたか？
と聞かれた時、襲撃者の犯人に連れ去られたが現地協力者と一緒に、逃げて、旅をしていた。
と説明したら、ネギから、兄さんすごいと言われました。他の二人はあきれ顔でした。

ネギよ、感心するでない

七話（後書き）

次回から、原作スタートです

八話　前編（前書き）

本編スターっト

八話　前編

おっす、おらレオン・スプリングフィールド、見送りのとき、アーニャの泣きそうな顔を見て、
めっさテンションダウンしています。

しかし、俺にはネギを守る使命が・・・、と言いたいのですが、聖遺物持ちがいつ襲ってくるか
分からない今、早く、エヴァンジェリンに預けて、修行をつけてもらった方がいいと、思い始めてます。
・・・そのネギ君なんですが、前回1か月ほど早く日本語の勉強が終わったので、ネギと一緒に遊んでいたら、ネギが、

「日本に着いたら兄さんに迷惑かけたくないから、今のうちに思いっきり、兄さんと遊ぶんだ！！」

と笑顔で言ってきたので、夜枕を濡らしてしまった。ネギの成長スピードが凄すぎる。

現状報告ですが、只今飛行機の中でネギと談笑中。

「なあ？ネギ、前に話した、赤い正義の味方の話覚えてるか？　」

「うん、とっても悲しい話だったけど、どうしたのいきなり？　」

「たぶんなんだけど、お前は英雄の息子だ、それはわかるだろ？
だから、危険なことに巻き込まれるか　もしれない、そんな時は

誰かを頼ればいい、そして強くなれ、冗談抜きでやばくなったら手伝って
やる」

「う、うん」

「はは、すまん、ビックリさせちまったな、まあ魔帆良なら危ないことなんてそうそう起こりはしない
さ、けど、俺が一番言いたいことはな、『善の反対は悪だ、だが正義の対義語はない』だ、まあ誰が
言ったか覚えてないけど、お前に覚えてほしい言葉だ」

「???　えっと〜〜」

「ぬははは、またまたすまんな混乱させちまって、まあぶちゃけ、お前はお前の正義を貫け、
周りに流されるな、ってことだ、そうだな〜〜、おう、そうだった、これは俺の経験談なんだが」

瞬間ネギの目がきらきらした、・・・そんな目で見ないでくれ。

「自分のとった行動には責任を持て、後悔して、その場から動こうとしないなんて言語道断だ」

「言語道断？」

「これこれ、勉強したでしょ、絶対にしてはいけませんって意味だ・・・・・たぶん（ボソッ）」

「ちょっと難しいけどわかった」

「うむ、それでこそわが弟！！」

「えへへ、あ、そうだ、兄さんの正義って何？　」

「おれか？おれは、お前と真逆だ、１０のうち大切な１だけ守れればそれだけでいい、１０のうち１０も
救えるのは、お前ぐらいだよ」

「え、そんなことないよ、兄さん、いつも僕を守ってくれて、とっても強いじゃないか」

「ありがとな、ネギ」

・・・おれは強くなんかない、弱い一吸血鬼（化け物）なんだ。

≪次はーー魔帆良学園中央駅ー≫

時間とはたつのが早いな。もう到着か。あ、ネギのおかげで目の保養はできました、
しかし、なぜくしゃみで魔力が暴走するのだろう？　もう一回やったら、お仕置きをかねて、調べるか？

そして魔帆良学園の地に降り立った俺達。

「迎えの人、いないなー」

「うん、いないね」

「しゃーない、遅刻するのもなんだから、いくぞ、ネギ」

「うっ、うん」

うむ、聖遺物に魔力喰われていても身体強化ぐらいなら魔法でなんとかなります。
ネギには、魔法で身体強化ばかりしていたようなので、基礎体力をつけさせました。
学校の登下校のとき、走っていただけですけど。

おっと、あのオレンジ髪は神楽坂　明日菜だな、うむ？原作イベントが発生するのか？　ネギは最近
成長しているようだし～～。

「何だと、このガキャ～～」

あるえ～～～～？　普通に起きちゃった？　なぜ？
・・・・・・・・・・・、しまったーーーーーー！！！
女心の勉強させるの、忘れてた～～～～～～～～～～～！！！！
これは、俺の責任でもある、止めなくては、って、すげ～～～～、
片手でネギ持ちあげてるよ、
じゃなかった！！

「あの～～、すみません、弟を放してもらえないでしょうか？　」

「ん？　誰よ、ってまたガキーー！！」

「ふわ！　ビックリした、いるの分からんかったわ！」

・・・・、そうこれこそ俺の前世からのレアスキル、影の薄さ。
俺が考え事をすると、結構の確立で発動するのだ！！　ｏｒｚ

「スミマセン、弟には俺から説教しときますので、許してください、悪気はほんとになかったんです」

「うっ、分かったわよ、それより何でガキがこんなところにいるのよ！！」

「えと、それは・・・」

「おーい、ネギ君、レオン君、久しぶりーー」

「あ、タカミチーー」

「え！・・・知り合い！！」

「どうだい、魔帆良は？　いいところだろ？　ネギ先生、レオン先生？」

「せ・・先生？」

「えっと、ここで話すのもなんですし、学園長室に行きませんか？
案内お願いしますタカミチさん」

「はは、相変わらず他人行儀だね、レオン君、じゃあ、案内するよ、明日菜くん達もついてきて」

「ぬらりひょんだと！！！！！」

「兄さん！！」

「いきなり失礼じゃの！！」

「スミマセン、言わなきゃいけない気がしたので」

「まあ、よい、修行といっても日本で先生とは、たいへんじゃの～、
じゃやがこの修行はかなり厳しい
ぞ、それでも大丈夫かの？」

「はい！！」

はは、元気がいいねネギは。

「モーマンタイですよ〜」

「そうかそうか、してネギ君、レオン君、彼女はいるかの？　うちの孫娘なぞ」

「いやや わ〜、おじ・・」

「ネギと結婚したくば、俺の許可を取れ！！！！！！！！！！」

「にににに、兄さん！？」

うむ、みんなビックリしてるな。愉快愉快。

「なはは、冗談ですよ、どうぞ続けてください」

「ふぉふぉふぉ、では今日から、２－Ａのネギ君が担任、レオン君が副担任として
　がんばってもらおう、では指導教員のしずな君を紹介しよう、入ってきてくれたまえ」

「はい」

・・・すげ、リアル巨ぬー、初めて見た。

「分からないことがあったら、彼女に聞くがいい」

「あ、はい」

「それと、アスナちゃん、ネギ君をお主たちの部屋に泊めてもらえんかの？」

「えーーー」

「学園長先生！！　兄さんはどこに住むんですか？」

「ふむ、レオン君には別の子の部屋に泊まってもらうつもりじゃ」

「そうですか」

さびしそうな顔をするな、ネギ。

「こらネギ、いきなり挫折か？　目標、立てたんだろ？」

「そうだった・・、ごめんなさい兄さん」

「では、二人とも教室の方行きなさい、それと、レオン君は放課後もう一度来てほしい、
泊めてもらう子と合わせたいのでの、それと、どの教科を担当するかも・・・」

「数学でお願いします」

「むわかった、では教室へ行きなさい」

「はい」

「了解」

ふむ、放課後に事情聴取か。

うむ、ネギとアスナの仲は微妙そうですね。

「えっと、レオン君とネギ君だっけ？　うちは近衛　木乃香ゆうんや、よろしゅうな？」

「よ、よろしくおねがいします」

「よろしくお願いします近衛さん、京都の方言ですか？　」

「外国人さんなのによくしっとるね～」

「はい、勉強しましたんで、・・あの」

「ん？　なに？」

「ボソ（後でネギに、今朝の悪い点を、女心のことを混ぜて説明してもらえませんか？）」

「ん、わかった」

ん、めっちゃぽやぽやした、話し方だな、これぞ、白魔導士だけに癒し系か？

「あ、わたしは、神楽坂　明日菜、よろしく・・・じゃあ、先に行かせてもらいますから先生達！！」

「うう〜〜、嫌われちゃったのかな、ぼく」

「ネギ、お前は、女の子に言ってはならないことを言ったんだ、そりゃ、怒る、けどそれに関しては
俺にも落ち度がある」

「え！！　兄さんは何も悪くないでしょ」

「そうでもなんだな、これが、まあ俺には分からない、こともないけど、近衛さんに
後で教えてもらえ、頼んどいたから」

「ありがとう、兄さん」

「よし、俺たちもさっさと教室に行くぞ」

「うん」

教室に到着。

「兄さんが先にどうぞ」

「こら、弟よ情けない、お前担任、俺副担任、ＯＫ？」

「う、うん」

ん？何か忘れてるような？
と思った瞬間、扉を開けたネギに、黒板消しが・・・！！やば、魔法障壁に引っかかった！！

「幻の右～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！」

すかさずキャッチ＆キープ

「むむ？　手が見えなかったアルよ！　強敵あるね！！」

「にん！」

「ほう」

教室から何か聞こえたが無視。
ロープ、無視。　落ちてくるバケツ、中身をこぼさないようにひっくり返してキャッチ。
おもちゃの矢、無駄無駄無駄無駄、ぜんぶ取ったドーー。

「「「「おーーーーーーー」」」」

「黙らっしゃい！！　なんばしちょんねん、あんたら、うちに恨みでもあるんかいな！　ゴラァ！！」

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」

おっと失敗、テンションおかしくなって、言語も無茶苦茶ですな。
が、これで黒板消しの方は誰も気にしないだろ。

「あーーー、ごほん、ネギ、挨拶」

「あ、えっと、今日からこの学校でま・・」

「あぽう!!」

「ぬぼろ!!!」

なーーに言おうとしてんだこのあほわ。

「やり直し」

「はい、この学校で英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。
3学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

おお、よどみなく言えたねぇ、感心かん・・

「「「「「きゃーーーーーーーーーーーー、かわいいーーーーーーーーーー」」」」」

あらら、もみくちゃにされとる、はぁ授業大丈夫なんかね?

「もしかして、そちらのお兄さんも先生!?」

パパラッチか、いいのりだね・・・、ん? 静まり返ったな?
まあ、ちょうどいい。さて、サングラスを外して。

「数学を教える予定の、レオン・スプリングフィールドだ、弟とも

どもよろしく頼む」

「え！　兄弟なの！！」

「あ！　言われてみれば、似てるかも」

「かっこいーーーーー」

うむ、いろんな反応をありがとう。

「じゃあ、質問を・・・」

「ＳＴＯＰ！！　いまは、ネギの授業時間だ、質問はこの後の、数学のとき受け付ける」

うむみんな素直でよろしい

「ねえ、あんたさっき黒板消しに何かしなかった？　何かおかしくない？」

ちっ、誤魔化しきれなかったか・・・、って委員長と喧嘩し始めたな、おい。

ラッキーである。

「しずな先生、すみませんが」

「はい、・・・時間も押してるし授業しますよー、ネギ先生お願いします」

一件落着、授業中アスナがネギにまたちょっかい出してたが、しか

たないか。
・・・・、エヴァさんの視線が怖いです。

俺の授業の番ですね、はい。
「質問！！ターーイム」
「出席番号順に、一人一つ、なければなしで」
一応釘は刺しておく。
「年齢は！！」
「１２歳」
「彼女はいますか！！」
「年齢＝彼女いない歴、てか作る気はない」
「なぜですか？」
綾瀬よ、恨むぞ！！

「・・・・、大事なものを増やしすぎると、なくしたとき辛いからだ」

俺みたいな、化けものは特にな。

「「「「・・・・・・・・」」」」

「ほい、次」

「えっと、その、・・・その髪と眼は、どうしたんですか」

ん？ああ、和泉か。

「何となく、言いたいことは分かるが、これは一人旅の途中、事故にあってこうなった、

それと、和泉、おれはこの髪と眼に関しては申し訳なさ、しかない」

「申し訳なさ？」

「そうだ、もともと、髪と眼は母親譲りだったんだが、それをこんなんにしちまったんだ、

けどお前のそれは、もともとだろ？　なら親からもらったお前だけの個性だと思えばいい、

親からもらった体の一部なんだ、たいせつにしろ」

「「「「「お～～～～～～～～～～～～」」」」」

「は、はい！！」

「はい、つぎ！！」

・・・・・・・・・・・・

「勝負するアル！！」

「却下！！」

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・

・・・

・

「よし、授業終了、おつかれだ」

「「「「「「ありがとうございましたーー」」」」」」

八話　前編（後書き）

続く

八話　後編

んで放課後・・・ん？　ネギのやつ魔法使いやがったな、まあ、状況が状況だしかたがないな。
さて、学園長室は～～～と。

「しつれいします」

「おお、レオン君、うむ、まだ泊めてくれる者はまだ来てないので、少し話をせんか？　」

「構いませんが？　」

「では、5歳のころ、いきなり一人旅と言って、家で紛いのことをしたみたいなのじゃが、
なぜかの？」

「いえ、ただ悪魔襲撃の際ネギを守り切る力を持っていませんでしたから、後先考えず修行の旅に
出ただけです、途中親切な人に助けてもらったり、怪我をしたりで、結局何もかもマイナス
でしたけど」

「無鉄砲なところはナギに似とるの～～、じゃが、この魔法学校の成績じゃが？　」

「それは、向こうの学園長先生が、成績は低いが、一人で生きていく術は持っているし、
ネギと一緒にいるべきだ、というわけで、卒業させてもらったのです」

「なるほどの」

コンコン

「失礼します」

「失礼するよ」

・・・・おおぅ、ガンナーとでこ剣士かい。監視役か？　エヴァンジェリンに頼まなかったのは、
悪の道をみせないためか？・・・・まいいさ、楽しくやろうや。

「うむ、君を泊めてくれる桜咲　刹那君と龍宮　真名君じゃ、二人ともよろしく頼むぞい」

「そうですか、桜咲さん、龍宮さん、よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

「うん、よろしく頼むよ」

さて、どうしたもんかねぇ。

刹那　Ｓｉｄｅ

なぜだろう、なぜか、彼とかぶる、私を化け物ではないと、肯定してくれた師匠達のうちの一人、
「ヴィルヘルム・エーレンブルグ」さんと、髪の毛の色、眼の色、同じところはある、けど、
師匠は、２０歳ぐらいだった、けどこの人は１２歳、身長だって違う、雰囲気だって。
けど、どこか似ている、どこか私と同じ、人ではない、そんな感じが・・・、いや、そんなこと、
を考えるのは、失礼だ、やめよう。

刹那　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

真名　Ｓｉｄｅ

ふむ、人間ではなさそうだ、魔眼がずっと反応している。けど、こちらに害をなすようなら、
滅すればいいだけだ。しかし、かすかにだが血の匂いがするような？　しかもどこかで似たような
血のにおいをまき散らしていたやつがいたような？　気のせいか？
さて、・・・ふむ、家事全般出来たらいいのだがな。そうしたら仕事も楽になる。
その辺は期待したいな。

真名　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

レオン　Ｓｉｄｅ

やっべーーーー、なんか超みられてます、さっきまで余裕ぶっこい

たけど、無理、
なんか、刹那の方は射殺さんとするぐらい見てくるし、
龍宮さんのほうはなんか値踏みしてるし、ってときどき眼光ってるよ！！怖いっす。

「さてと、紹介も終わったし、これで失礼させてもらうよ」

「っ、そうでした、それでは失礼します・・・あ、レオン先生、教室で先生達の歓迎会をする
ので、一緒にきてください。」

「わかりました、それでは、学園長先生、失礼します」

「うむ、がんばるんじゃぞ」

さすが、２－Ａテンション、パないっす。
歓迎会なのに、俺達より騒いでるよ・・・ってネギよ、なにしとんねん。
読心術はいけないっしょーー、ありゃ？　そういえば原作イベントがあったよーなー？
お！アスナが飛び出していった！！　あ～これだ、まあ、ネギよ、男として成長しろ。

んで、歓迎会も終わり、お二人さんの部屋で、荷物を整理中、
いやはや、研究所でぱくった物が結構多くてね、あ！！言うの忘れてたけど、研究所で、
『別荘』を発見したんです、２つ見つけたから、拓真と半分こしたわけなんですよ。
影に物入れすぎると、出すとき時間がかかるので必要なものだけ影に収納して、のこりを
この別荘にいれてます、ついでにいろいろ改造したし、一人旅のとき、さびしくなったから、
召喚魔法で呼び出したダチ公を住まわせてます、ちなみに俺はあんまり使ってません。
化け物になってから、年齢とか関係ないとは思うけど、年はとりたくないのでね。

ははははは・・・・・、って静かやなー、桜咲達どこいっ・・・・、あ～～～～、
別荘、起動しちゃってるよ。
別荘運ぼうとして、中にはいちゃったか～～～、て、やべーーーーーーー！！！！！！！！！
中にいる奴らと合わせたら、ピンチだーーーー。

「さて、言い訳はあるかい、レオン先生？　」

龍宮さん、怖すぎです、俺が何をしました？

「ふう、まあいいさ、けどいろいろ話してもらうよ、そこにいる、悪魔のこととや、
君について、・・・さあ、きりきり吐け」

龍宮さんそんなキャラだっけ？　チクセウ。

「いいんじゃないかい？　レオン、二人とも口かたそうだし、片方ハーフだし、魔眼持ち出し？」

おおう、「タクトさん」や、桜咲の前でいきなり暴露話はやめて！！　めっちゃ殺気出しちゃってるよ！
ちなみに、タクトは二番目に召喚した低級悪魔さんだ、今では中級よりちょい上の力を持っているけどね。

「あーーー、はいはい、わかりましたよ、さてどこから話しましょうか？」

「とりあえず君の正体を教えてくれないかい？」

あーー、人間やめてますからね～～～。本人じゃないって思われてるか？
シャーない全部暴露しましょう。

「とまあ、そんな感じで、自分は人間やめました、納得いきました？」

「「・・・・・」」

なんか、思うところがあるのか、二人とも黙りこんでしまいました。
まあ、眼の前に、大量殺人者兼化け物がいるんですからしかたないですかね？

「・・・、できれば聖遺物の力ってやつを見せてくれないかな？」

おおう龍宮さん、いきなり企業秘密に触れますね、・・・どうしよう？
まあ全部見せてもいいんだがかね～。

「ん～～～、見せろっていっても、いろいろあるからね？」

チャキ

スミマセン、龍宮さん、銃おろしてください。

「は～～～、タクト、すまないが、付き合ってくれ」

「はい、模擬戦ですか？」

「は～～～～、気が進まないけど、殺し合い（・・・・）で」

俺は影から、愛槍をとりだす。俺命名、「ブラッディ・ローズ」、こらそこ、中二臭い言うな。

「分かりました、では」

そう言うと、タクトは大剣を召喚し斬りかかってきた。

真名　Ｓｉｄｅ

正直言って、眼の前で起こっていることが理解できなかった。斬って、殴って、穿って、刺して。

眼の前で、血が飛び散り、肉が削られ、骨が折れ、力を見せるために殺し合いをするなどあり得ない。

そんな惨状を作り出してる、悪魔と自称化け物、いや、彼こそ化け物と言えるだろう。

斬られた部分は再生し、斬り飛ばされた自分の体の一部を食べ再生を早める。

強化もなしに人外の腕力、脚力を駆使し悪魔と肉薄している。

学園長、彼の監視という依頼、一歩間違ってたら死んでいたよ。

刹那　Ｓｉｄｅ

彼を見ていると、自分は化け物としては、かわいい方なのではないか？　と思ってしまう。
失礼極まりないだろうが、私はそう思ってしまう、眼の前の存在がこわい、ただ怖いのだ。

しかし、どこか殺し合っている彼の雰囲気は、師匠のものと似ているような気がした。

あ～～～～、久しぶりに、おもいっきり体を動かした気分。
って、めっちゃ二人引いてるやん！！　自分から見せろ言ってそれはないよ。
服もぼろぼろやん、今度新しいの買いに行くか。
「で、感想は？」

「「・・・・・・」」

ジーザス！！　まただんまりかよ！！

「別に取って食うわけでもないし、人襲う気もないし、警戒するのやめてくれ、
俺のハートはブロークンよ？　」

「すまなかった」

龍宮さーん！！あなたそんなキャラだっけ！？　素直に謝るのはいいことだけどさ！！

「すみませんでした」

桜咲～～！！土下座はやめてーーー！！おれのライフはもう０なのに！？

「いや、分かってくれたらいいんだけど・・・じゃあこの件は他の魔法先生には秘密ってことで、
　それなりの対価も払うから、それで手打ち」

「わかった」

「わかりました」

「んじゃ、戻ろう？　夕飯俺が作るから」

「「え？」」

なに、そのめっちゃ意外！！　みたいな顔。

「一人旅してたし、趣味みたいなものさ、飯食ってさっぱりしようや」

「あ、また別の悪魔紹介するから、その時それぞれの得物もってきてね？　」

「「まだ、いるのかい！！」」

八話　後編（後書き）

疲れた~~~~~~~~~~~~~。

さて、泊るところ確保、あとは、エヴァさんと交渉するだけです。

九話目（前書き）

次は、期末テストですかね～～。

たいへんだ～～

九話目

別荘での件で少し距離を置いていた二人ですが、俺の人間味あふれる行動により、
わだかまりもなくなり、普通に接してます。ついでに下の名前で呼ぶことを、
義務づけられました、龍宮さんは下の名前で呼びにくかったから、
「タツミー」、
とよんだら、撃たれました。ゴム弾って結構痛いんですけどね～～。

とりあえず、聖遺物のことを黙ってもらう代わりに、別荘で修行すること、
別荘にしまってある、研究所からパクってきた物の観覧、譲渡、レンタルなどを許可、
もう一人の、研究熱心な最初に呼び出した悪魔、「カシス」に頼んで、刹那達の武装の
強化なども行った、強化と言っても刹那の場合、夕凪から染み出ている怨念やら悪霊やら、
を浄化するだけ、悪霊に関しては少し食べさせてもらいました、人間を殺さなくても、
他の異形の魂で聖遺物の強化ができるのは、嬉しかった、魔帆良じゃあ、人殺しなんて
できませんからね。タツミーには、鬼やら悪魔やらに効果があるＢＢ－弾を作りました、
カシスが対魔族の力を付与しただけですが効果は絶大でした、ふざけて、俺で試し打ち
したら、グラサンと顔の右三分の一が吹っ飛びました。グラサンを弁償することで、
手打ちにしましたが、？番さんにならって自分も、ブランド物のグ

ラサンをかけていたので
タツミー涙目でした。

ザマァ・・・

そんなこんなで、いろいろありましたが。そのほかの原作イベントはそのまますすめました。
原作と違う部分は、俺の説教が追加されたことぐらいですかね。
惚れ薬は本当は作っちゃいけないよ、とか魔法乱用禁止!!などなど。

さてさて、只今、エヴァンジェリン宅にいます。
一応、放課後、買い物帰りの茶々丸さんを見つけ、伝言を頼んだんですが、
訪問するなり、

「何の用だ？　英雄の息子、わざわざ殺されにきたか？」

と言われ、めっちゃ睨まれました、

あるぇ～～～？　『闇の福音』と話し合いたい（・・・・・・）って、伝言を頼んだはずなのに？

とりあえず、交渉を開始。

「とりあえず、魔法先生達に聞かれたくないんで、結界はりたいんですけど？」

「ほう？　そこまでする必要のある情報なんだな？　いいだろう結界は私がはってやる、
　つまらない情報だったら貴様の血、すべてもらうからな？」

・・・・・俺の血もろ聖遺物なんですけど？　どうしましょ？

「えっと、まず、サウザンド・マスターの情報を・・・」

「は？　なんだそれは、奴は十年前に死んだんだろ？」

「生きてますよ？」

「なに！！　それはほんとか！？」

苦しいです、胸倉つかまないで～～～！？

「・・・証拠はあるのか？　」

「六年前ネギが父さんから杖をもらってます、自分も遠くから確認しましたが、
あの無茶苦茶ぶり、確実に父さんです」

「そうか、奴はいきてたか・・・ははははははは、そう簡単にくたばるやつではない
と思っていたがそうか、生きているか、っははっははは・・・・」

すげー、テンション高くなったな?落ち着くまで、しばらく待つか。

「で、貴様はその情報の対価になにを望むんだ? 」

「この情報の対価は、ネギの力になってほしい、と言ったところですかね? 」

「力になる? この『闇の福音』になにを求めているんだ? 」

「正確には、ネギと戦って、戦いというものを、敗北という形で、教えてほしいんです、
それから、エヴァンジェリンさんのもとで修業させてほしいのです」

「・・・エヴァでいい、しかし何を考えているのだ? 私は悪い魔法使いだぞ?
あの、ボーヤはみたところ『立派な魔法使い』を目指しているなら、選択としては、
最悪なんじゃないか? 」

「あなたがただの悪い魔法使いなら、頼みませんでした、けどあなたは誇りある悪を
　掲げている魔法使いです、ベクトルは違えど、その信念、その正義、尊敬します」

「そ、そうか、うむ、なら交渉成立だ・・・・でまだ、あるんだろう？　」

「はい、自分のことについてです、この髪と眼について何か説明はありましたか？　」

「一人旅の途中の事故のせいと聞いたが、違うのか？　」

「はい、見せた方が早いので、少し失礼します」

おれは、影の中に用意しておいたグラスを引っ張り出し、手から杭を出し腕に深めに
傷をつけ、グラスに血をためた。

「おっ、おい！！　なにをして・・・」

「傷がふさがっていくの見えます？　」

「むっ、なんだその治癒速度は！！」

「それも含めて、この血、何か変なところありません？　」

「どれ？　」

「あ！！　ちょ、飲んじゃだめですよ！！」

「んグ！！　いきなり大きな声を出すな、別に飲んでもかまわ・・・ってなんだこの
血中魔力量は！！　尋常じゃない良だぞ！！　」

「えと？　あれ～～～？　それだけですか？　」

「まだ何かあるのか！？　」

「えーーと」

とりあえず、聖遺物のことをはなした。

「つまり、貴様の髪と眼は聖遺物のせいで色素が落ち、貴様の血と同化しているから
調べてほしかったと・・・そんな危ないもの飲ますな！！　」

「まあ、何ともなかったんだから、問題なしってことで、それに、体の外に出るとその血は
聖遺物じゃなくなるってことも分かりましたし」

「私はその実験に体を張ったわけだが？　」

「んむう、分かりました、ではこの情報の対価は今の実験、それとあなたへのメリット
が強い条件にしましょう・・・・同盟、みたいなものを組みませんか？　私は、吸血鬼
というより、ヴァンパイアみたいな存在ですし、悪くないと思いますよ？」

「ほう、なら新しく手に入ったサウザンド・マスターの情報は一番最初に私に持ってくること、
その聖遺物とやらの情報提供、貴様の血をもらう、この条件でなら、
同盟をくんでやらんこともない」

「・・・、ふぅ、わかりました、飲みましょう、これで同盟成立です」

「そうか、では同盟も結んだことだし、レオンと呼ばせてもらうが・・・よし、
レオンさっそく貴様の血をいただくぞ」

さっそくですか～～、とあきらめながら、またグラスに血をためようとしたら、
エヴァさんが膝の上に乗っかっていた、なぜ？

「あの～～、エヴァさん？　何してるんですか？　」

「なに、首から吸った方が楽だからな、それに貴様も役得だろ？」

ん～～～、自分ロリコンではないですから別にねえ？

「あが！？」

「？　どうしました」

「貴様の皮膚が固すぎるから歯が通らないではないか！？　」

なるなる、しゃーないので、じぶんで首に傷をつけましたが・・・

あんまり、
気分がいい行為ではないですね。

「ふう、さすが、でたらめな魔力量だな、なかなか美味だったぞ」

あざーす、褒められてもうれしくありませんよ

「では、こんど別荘持ってきますんで、その時聖遺物の情報を全部お渡しします」

「そんなものまで、もっていたのか・・・、まあいい楽しみにしてるぞ」

ふい～～～、緊張しました、さっさとと帰って、夕飯の準備しなくちゃね

九話目（後書き）

誤字脱字、疑問、指摘なんでもございです、感想待ってます

更新停止のお知らせ

いきなりですが更新停止のお知らせです。
行き当たりばったりで書いてきたので、ツケがまわってきました。
敵に関する設定があいまいなまま、なので厳しくなってきました。

それにところどころ、話を端折ったりしているのがさらに自分の首を絞めている
ことにもきづきました。

それに、そろそろ受験なので更新」がかなり遅れてしまうので、
ここいらで気持ちを切り替えようと思いました。

別のほうの小説はこのまま、突っ走るので、応援よろしくお願いします。

感想、意見は随時募集中です、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8950m/

ネギの兄貴は吸血鬼？

2010年10月28日06時28分発行